

【奨 励 賞】



氏 名 ワン エイダン トモカズ
国・地域 ニュージーランド
在日期間 2年
所 属 ALT (喜界町教育委員会)

タイトル: 幸せをつなぐ三線

2020年12月、私は喜界島にALTとして赴任した。喜界島に行くことが決定した時から、私の周囲の人々は、私は喜界島には長くいることはないだろうと思っていた。誰よりも私もそうだった。都会生活ばかりだった私にとって、孤立した島で、限られた人間関係で生活することは、不安でいっぱいだった。しかし、それは三線との出会いで、すべて変わった。

三線は、喜界島では一家に一つあるくらい重要な楽器です。島魂を唄にのせて、三線と共に、文化や歴史を伝えます。三線は昔の辛い歴史を保存している道具であり、結婚式の時には、楽しくお祝いをする道具でもあります。嬉しい時も、悲しい時も、いつも三線はそばにいます。

新型コロナウイルスが拡大した当初、島の唯一の外国人として、喜界島に住み始めた私は、とても不安に感じていた。島の人々が、自分のことをどう思っているのか、どんな風にコミュニケーションをとっているのかわからなかった。そんな時に、ある人から奄美三線と出会う機会を得た。

練習が始まり、演奏を聞いたときに、言葉にならないほど、心が震えた。方言で意味はほとんどわからなかったけれど、そこには魂があった。島の人々は、私が理解できるように工夫をして教えてくれた。お年寄りも子供も、若い人も、年齢関係なく、魂をのせるその姿は、衝撃的だった。

その日から、私と三線の旅が始まった。少しずつ弾けるようになり、音楽の楽しさをあまり知らなかった私が、どんどん音楽の世界にのめり込んでいった。そして、三線を持って旅をすることになった。瀬戸内海、大阪、京都、奄美大島、沖縄、そして鹿児島市。三線を持って旅行をしていると、おもしろいことが起き始めた。初めての土地で、初めて出会う人も、三線を持っている私には、たくさん日本人が話しかけてくれた。

「音楽好きなの?」「何を弾くの?」など、普段ならできない会話ができた。その人達の中には、有名なミュージシャンもいた。彼らとセッションができたり、案内してもらったり、かけがえのない時間を手に入れた。

今年の9月、この三線のおかげで、信じられないことが起きた。大阪に住む祖母に、初めて三

線の演奏を聞いてもらった。喜界島での生活について、祖母に聞かせたかったので、2,3 曲島の唄を演奏し、唄を歌った。そして、奄美の「島ブルーズ」を弾き始めると、なんと祖母が突然歌いだした。私はとても驚いた。まさか、祖母とセッションできると思っていなかった。三線と出会って練習してきた日々は、きっとこの瞬間のためだったと感じた。三線は、私と祖母の距離を、より縮めた。

三線と喜界島の人々との出会いにより、私は想像もしていなかった財産を手に入れた。喜界島に赴任が決まり、不安だらけだった自分に、言いたい。多くの出会いと、三線との出会いにより、これまで以上に充実した日々が待っているよと。これからも、幸せをつなぐ三線と私の旅は続きます。どうかみなさんも、自分の幸せをつなぐ三線を見つけてください。